稀有ナル上顎竇異型ニ就テ

Schingo Tada: Über eine abnorme Kieferhöhle.

東北帝國大學耳鼻咽喉科教室 (主任 和田教授)

醫學士 多 田 愼 吾

一. 緒言並ニ文献

凡ソ上顎竇蓄膿症ニ於ケル鼻根治手術ハ、我々耳鼻咽喉科醫ノ最モ屢々經驗スル手術ニシテ、然モ常ニ最モ平易ニ施行セラル、モノナレドモ、稀レニハ全く異型例ニ遭遇シテ、其手術ニ躊躇スルコト少ナカラズ。余モ亦上顎竇根治手術中全く稀有ナル上顎竇異型ノ1例、即チ下鼻道側壁ノ最モ極端ニ陷沒セル甚ダ珍奇ナル1例ヲ經驗セルヲ以テ、敢テ之レヲ報告シテ諸賢ノ御批判ニ供セント欲ス。

抑々上顎竇異型トシテ既ニ報告セラレタルモノ、多クハ、上顎竇腔内ノ隔壁形成ニヨル竇2分ニ關スルモノニシテ、即チツツケルキ、ンデル、ハーエック、ブリュール、オッピコーフェル等ノ諸氏ハ、何レモ上顎竇腔ノ2分ニツキ其症例ト共ニ其成因ニツキ論述セルヲ見ル。我國ニ於テモ吉永氏ハ明治42年並ニ大正5年ノ2回ニ亙リ、日本人ニ於ケル上顎竇ノ解剖的研究ナル名題ノ下ニ、上顎竇ニ關スル諸種ノ研究報告ト共ニ、上顎竇異型ニツキテモ詳細ナル報告ヲナセリ。而シテ氏ハ436例剖檢中6例ニ於テ兩側下鼻道側壁ノ異常ニ陷沒セル例ヲ見タリト報告セルモ、何レモ余ノ經驗セル例ニ比シ其程度遙ニ輕度ナルモノ、如シ。其他本邦ニ於テモ竇2

分ニ關スル文献ハ屢々之レヲ發見スル處ナルモ、余ノ症例ノ如キハ未ダ其報告アルヲ知ラズ。蓋シ甚ダ稀有ナル1例タルモノト信ズ。

二. 症 例

患 者 小○正○、♂、22歳、農。

家族歴 遺傳的關係ニハ特記スベキモノナシ。正常分娩。母乳ニテ飼育サレ、麻疹ハ既ニ經過シ、種痘ハ2回、酒、煙草ヲ好マズ。特ニ花柳病ヲ患ヒシコトナシ。生後10歳頃マデハ屢々胃腸障礙ニ悩マサレシモ、10歳以後ヨリハ全く健全ニシテ特筆スベキ疾患ヲ患ヒシコトナシ。但シ12歳ニシテ左側中耳炎ニ罹患シ以來時折耳漏ヲ訴ヘタリ。

現病歴 一昨年冬頃ヨリ患者ハ交代性鼻閉塞ヲ訴ヘ、其頃ヨリ過激ナル勞働ヲナス際ニ惡臭アル鼻汁ニ苦シメラレタリ。以上ノ諸症候ハ次第ニ惡化シ、約50日前ヨリハ屢々頭痛アリ爲メニ睡眠不完全トナリ食欲進マズ。尙ホ記憶力減退ヲ來セリト。而シテ鼻閉塞、惡臭ナル鼻漏ヲ主訴トシテ昭和9年6月26日當外來ヲ訪レ、當日手術治療ヲ希望シテ入院セリ。

一般所見 顔型寧ろ細長シ。營養佳良。體格

中等度。肘腺ヲ觸知セズ。胸腹部=異狀ヲ認メズ。膝蓋腱反射及ビ瞳孔反射正常。眼底=變化ナク。檢便。檢尿=病變ナシ。血液ノワッセルマン氏反應及ビベンツォヒョール氏反應何レモ陰性。

局所所見 鼻ノ外觀異常ナシ。右側鼻腔=於テハ中鼻道=著明ナル膿汁ヲ認メ、殊=中鼻道ノ前上方ヨリモ明=膿汁ノ流下セルヲ見ル。尙ホ嗅披裂=モ膿汁存在シ正=全竇炎ノ所見ヲ示ス。左側モ中鼻道=ハ膿汁豊富ニシテ前額竇並=上顎竇炎ノ所見ヲ認ム。兩側共=下甲介ハ著明=肥大セリ。鼻中隔ハ上部=於イテ輕度=左側=彎曲セリ。犬齒窩部及ビ眼窩上内隅=於テ壓痛ヲ訴フ。尙ホ齒牙=於イテハ左側第1大臼齒ガ齲齒=テ既=摘出セラレオルノミ=テ他=異常ナシ。咽腔後壁=ハ膿汁多量=存在ス。左側耳=於テハ鼓膜ノ後上部=小ナル穿孔存在シ濃厚ナル膿汁搏動的=流出ス。乳嚢部=異狀ナシ。「コレステリン」化學反應陽性ナレドモ。「コレステリン」結晶ヲ證明シ得ズ。

診 斷 右側慢性全竇炎。左側慢性上顎竇並=前額竇炎。左側慢性穿孔性中耳炎。其他血液檢査ノ結果ハ殆ンド正常。血液沈降速度1時間15。血液凝固時間5分40秒。

手術的所見 左側。鼻根治手術ハコールドウエル、リューク氏ノ術式ニ從フ。犬齒窩部軟組織=異常ナシ。犬齒窩部ノ骨壁ハ中等度ノ厚サヲ有シ特=凹下セル所見ナシ。型ノ如ク犬齒窩骨壁ヲ圓形=鑿除シタルニ、全ク弾力性=富メル一見囊腫壁ヲ思ハシムル竇粘膜樣物質ノ露出ヲ見タリ。而シテ該粘膜ヲ骨壁ヨリ剝離スル=甚ダ容易ニシテ殆ンド出血ヲ見ズ。之レヲ完全=剝離セルニ内方ハ梨子狀孔ニ達シ、然モ梨子

模 型 圖
下鼻道側壁ノ著明ナル陥入ヲ示ス
S.....上顎骨

狀孔側方ノ骨壁ハ完全=之レヲ缺損セルヲ以テ直チ=鼻腔内粘膜=移行ス。次=該粘膜ヲ除去シタル=直チ=下甲介ノ露出セルヲ見タリ。即チ該空洞ノ内壁存在セザル事ヲ知レリ。而シテ該空洞ノ内壁ノ存在スベキ處(正常時ノ下鼻道側壁)ノ骨缺損部ノ廣サハ次ノ如シ。

前方 梨子狀孔=一致ス。

後方 梨子狀孔ヨリ後方約3.5cmノ距離。

上方 下甲介ノ附着部=一致ス。

下方 固有鼻腔ノ基底。

次=該空洞ノ側上方部ノ骨壁甚ダ菲薄ニシテ、之レヲ鑿除セル=初メテ固有ノ上顎竇腔ヲ發見セリ。竇粘膜著明=肥厚シ、尙ホ膿汁ノ溜溜ヲ見タリ。而シテ此竇ハ明=鼻腔ノ中鼻道=通ズ。即チ自然孔ノ存在ヲ知ル。從ツテ前述セル空洞ハ下鼻道側壁ノ著シク陥没シテ生ゼシモノ、如シ。

兩竇ノ大サ(最大徑)ヲ示セバ、

固有上顎竇		下鼻道側壁ノ陥入窩	
高	サ	高	サ
巾		巾	
深	サ	深	サ
	1.3cm		2.5cm
	1.8cm		2.0cm
	2.3cm		3.5cm

右側 左側手術後8日目=右側鼻根治手術ヲ

施行ス。

手術の所見ハ左側ト殆ンド同様ニシテ下鼻道側壁ハ異常ニ陥没ス。而シテガラ左側ニ比シ其度幾分軽度ナリ。從ツテ固有上顎竇腔ハ左側ノモノニ比シ稍々大ナリ。

兩竇ノ大サ(最大徑)次ノ如シ。

固有上顎竇		下鼻道側壁ノ陷入高			
高	サ	2.0cm	高	サ	2.1cm
巾		1.6cm	巾		1.5cm
深	サ	2.8cm	深	サ	3.0cm

術後ノ經過 術後約1週目ヨリ1日1回洗滌ヲ行フ。經過頗ル順調ニシテ次第ニ膿汁分泌減少セリ。其後甲介切除術並ニ前額竇開放等ヲ施行シ。約40日間ノ入院治療ニテ著シク輕快シテ8月3日退院セリ。

組織的所見 下鼻道側壁陷入部ノ粘膜ハ著明ニ肥厚シ輕度ノ炎症性變化ヲ認ムルノミニシテ他ハ殆ンド鼻腔粘膜ト異ナル處ナシ。

三. 考 案

上顎竇ハ副鼻腔中ノ最大ナルモノニシテ。其竇壁ヲ構成スルモノニ。内側ニハ鼻腔側壁アリ。上部ニ眼窩アリ。下部ハ上顎齒槽突起ニ連リ。前壁ハ所謂犬齒窩ヲ形成シ。外壁ハ翼狀上顎高ニ境ス。サレバカ、ル諸壁ヨリ構成セラル、竇腔モ。亦個人ニヨリ種々異ナリタル形態ヲ示シ來ルモ甚ダ當然ナル事實ナレドモ。多クハ大同小異ニシテ。之レガ全ク異型トシテ認メラル、モノハ亦甚ダ稀有ナルモノナリ。

而シテ種々ナル上顎竇異型ニツキ。之レガ概略ヲ述ブレバ。

1. 上顎竇凹陷形成。

之レハ廣大ナル竇腔ノ場合ニシテ。上顎竇腔ガ種々ナル方向ヘ異常ニ擴張スルコトニヨリ招

來スルモノニシテ。其方向ニヨリ次ノ如キ種々ナル名稱ヲ附ス。

(イ)齒槽凹陷。(ロ)口蓋凹陷。(ハ)下眼窩凹陷。(ニ)顴骨凹陷。(ホ)口蓋骨凹陷。

2. 竇腔ノ異常ニ狹窄ナル場合。

竇腔ノ狹窄ヲ來タス原因ニツイテハツツケルキヤンデルニ依レバ次ノ如シ。

(1) 竇壁ニテ骨海綿質吸收ノ不完全ナル場合。

(2) 鼻腔側壁ト顔面壁ト相接近スル場合。

(3) 犬齒窩ノ著シク凹陷スル場合。

(4) 竇壁ノ肥厚ニヨリテ。

(5) 以上ノ諸條件ノ綜合ニヨリテ。

(6) 鼻腔側壁ノ著シク陥没スル時。

(7) 齒牙停留。

而シテ第6ニ掲ゲタル鼻腔側壁ノ著シク陥没スル場合ニモ亦2ツノ場合アリ。其1ハ竇腔ノ上部即チ鼻腔ノ中鼻道ノ側壁ニ於ケル時ニシテ。其2ハ下鼻道ノ側壁ガ強く外方ニ穹窿ヲナス場合ナリ。余ノ偶々經驗セル症例ハ正ニ後者ニ屬スベキモノニシテ。其最モ極端ナル1例ナリ。即チ。通常下鼻道側壁ノ陷入スル場合ニハ。其部ニ相當スル上顎竇ハ裂溝狀ヲナシテ存在スルモノニシテ。吉永氏モ亦436例ノ剖檢中6例ニ於テカ、ル症例ヲ經驗シタレドモ。何レモ鼻腔側壁ト對側壁トハ互ニ相接近シ。爲メニ竇底ハ恰モ艦底ヲ見ルガ如キ狀態ヲ呈セリト記載セリ。然ルニ余ノ症例ニ於テハ全ク之レヲ認メズ。殊ニ左側ニ於テ著シク。即チ下鼻道側壁ト之レニ對應スベキ竇腔ノ側壁トハ。既ニ癒合セルカノ如ク。上顎竇ガ遙カ側上方ニ壓縮セラレテ存在スルノミナリ。

3. 隔壁ニヨリ竇腔ノ2分セラル、場合。

之レ＝亦2ツアリ。即チ、竇腔が垂直板ニヨリテ前後ノ2腔ニ分離セラル、場合ト、水平板ニヨリテ上下ノ2腔ニ分タル、コト、アリ。何レモ稀有ナル異型トセラル、モ、是レニ關シテハ洋ノ東西ヲ問ハズ、其報告割合ニ多ク、副鼻竇異型トシテ記載セラル、モノ、多クハ之レニ屬シ、殊ニツッケルキヤンデル並ニブリュール等ハ其成因ニ就テ詳細ナル報告ヲナセリ。尙ホ特ニ篩骨蜂巢ノ前下方ニ異常ニ延展スルコトニヨリ、固有上顎竇ハ側外方ニ壓迫ヒラレテ恰モ余ノ症例ノ如キ所見ヲ呈スルコトアルモ、カ、ル場合ニハ下鼻道側壁が骨性或ハ膜様性ニモセヨ、上顎竇腔内壁ト別箇ニ存在スベキモノニシテ、余ノ症例ニ於テハ恐ラクカ、ル成立機

轉ヲ除外シ得ルモノナラン。

四. 結 論

1. 22歳ノ男子ニシテ、上顎竇蓄膿症ニテ根治手術中發見セラレタル、全ク稀有ナル上顎竇異型ノ1例ナリ。

2. 而シテ下鼻道側壁ノ極端ニ側方ニ向ツテ陷没セルモノニシテ、殊ニ左側ニ於テハ下鼻道側壁ト、上顎竇側壁トハ、全ク互ニ癒合セル觀ヲ呈ス。

3. 固有上顎竇ハ、兩側共ニ自然孔ヲ以テ中鼻道ニ連絡ス。

4. 下鼻道陷入部粘膜ノ組織の所見ハ、鼻腔内粘膜ト殆ンド異ナル處ナシ。

擲筆ニ臨ミ御懇篤ナル御指導ト御校閲ノ勞ヲ賜
ハリタル恩師和田教授ニ滿腔ノ謝意ヲ表ス。

Literatur.

1) Brühl., Zur Zweiteilung der Nebenhöhlen der Nase, Zeitschrift für Ohrenheilkunde, Bd. 40, 1902. 2) Brühl., Zur Anatomie der Nebenhöhle der Nase, Vortrag gehalten in der Berliner med. Gesellschaft am 7. III. 1900, Berl. Kl. Woch. Nr. 41. 3) Hajek., Die Nebenhöhle der Nase, 1915. 4) 森龍雄, 稀有ナル副鼻腔ノ異型, 耳鼻, 第6卷, 昭和8年. 5) 吉永虎雄,

日本人ニ於ケル上顎竇ノ解剖的研究, 東京醫會誌, 28卷, 11號, 明治42年. 6) 吉永虎雄, 再ビ日本人ニ於ケル上顎竇ノ解剖的研究, 東京醫會誌, 30卷, 大正5年. 7) Zuckerkandl., Die Anatomie der Nasenhöhle, 1892. 8) Zuckerkandl., Normale und pathologische Anatomie der Nasenhöhle, Bd. 1, 1893.

(原稿到着ニ昭和9. 12. 5)